

「ワイルドとシドニー」

岩 永 弘 人

1881年、オスカー・ワイルドが『詩集』を発表し、それをオクスフォードのステューデント・ユニオンに寄贈しようとした時、当時の会長オリヴァー・エルトンは、それがプレジャリズムの集合体であるとコメントし、その受け取りを拒否する。その時の理由を、彼は次のように述べている。「それら（詩）は、実際、フィリップ・シドニーによって、ジョン・ダンによって、バイロン卿によって、ウィリアム・モリスによって、アルジャーノン・スウィンバーンその他によって書かれたものだ。」⁽¹⁾ワイルドが模倣したとしてここに挙げられている、イギリスの大詩人のカタログの中で、フィリップ・シドニーの名前だけが、(少なくとも)現代の読者には違和感を与える。エリザベス朝の華とも言えるシドニーと19世紀のデカダン、ワイルドに共通点などないように思われるからである。ワイルドは、エルトンの言葉通り、シドニーから影響を受けている、あるいは意図的にその模倣をしたのであろうか。そして、もしそうならワイルドはシドニーのどこにひかれてそうしたのであろうか。本論では、その点を、次の3つの視点から考えてみたい。

1つ目は、この2人の詩人（シドニーとワイルド）の共通点——特にその批評論における共通要素——を探ることである。彼ら2人は、特に人工と自然に対する考え方において、かなりの共通した考え方を持っていたように思われる。2つ目として、1886年12月にワイルドが『ペル・メル・ガゼット』に載せた「2つのシドニー伝」という匿名の書評を詳しく見ることによって、ワイルドにとっての、詩を弁護する全人的ヒーロー詩人としてのシドニー像を考えていくことである。⁽²⁾この短い書評の対象は、ほぼ時を同じくして発表された、J・A・シモンズとエドマンド・ゴスのそれぞれの、フィリップ・シドニーに対する伝記であった。⁽³⁾ワイルドは、この2つに対して、多少の皮肉を交えながら（匿名で）批判を加えていくわけだが、そうしていく過程で、彼自身のシドニーへの、あるいはシドニー的なものへの、愛着をのぞかせている。そういう意味で興味深いこの書評を少し詳しく見てみるが、その際、E・B・パートリッジの論文「まじめでないことの大切さ」（『バックネル・レビュー』、1960）を

視野に入れ、ワイルドが、シドニー同様、バルダッサレ・カステリオーネのいう「スプレツァトゥーラ」の詩人だったという著者の主張を再検討して、彼とシドニーの同一性についてさらに考えてみたい。⁽⁴⁾最後に3番目として、ワイルドの『W・H氏の肖像』に登場するシドニー像を吟味してみる。ここでは、「友愛」(Friendship)によって結びつけられた芸術家同士(特に、同性同士)のプラトンの魂の交流について論じられていて、その例の1つとしてシドニーの名前が登場してくるのである。

但し、1番目の点はそれほど目新しい点でもないように思えるので、その確認をするに留め、むしろ第2の点——特にエドモンド・ゴスとJ・A・シモンズのシドニー観に対するワイルドの見方——と第3の点を詳しく見ていきたいと思う。

(1)『虚言の衰退』と『詩の弁護』の類似性

ワイルドの『虚言の衰退』(*The Decay of Lying*, 1889)とシドニーの『詩の弁護』(*The Defence of Poesie*, 1595)には共通する点がいくつかあるように思われる。その中で一番大きいのは、芸術の、自然に対する優越という考え方であろう。周知のように、ワイルドは『虚言の衰退』の中で、芸術が鏡ではなく、ボールであると定義している。それは「どんな林地にもいない鳥や、どんな森も知らない花々」を持っている、と彼は言う。「芸術が持っているのは『生きて人間以上にリアルな形式』である。」有名なロンドンの霧のたとえも、この事の例証であり、「芸術が人生を模倣する」というのも同工異曲のものだ。⁽⁵⁾

一方フィリップ・シドニー(1554-1586)は、詩以外のもの——たとえば哲学や歴史——を、自然という対象を借りた、自然から離れる事のできないものと規定したあとで、詩のみが人間の想像力だけを素材とし、またそのエネルギーとする事を誇らしげに宣言する。そして、ローマ人が詩人を、創造者「ポエタース」と呼んだのも、この「無から有を作り出す」詩人の力を考えたゆえであるとしている。シドニーの言葉を少し引用してみよう。「ただひとり詩人のみは、そのようないかなる隷属的立場にも縛りつけられることを潔しとせず、彼自身の創意発明の湧き上がる力によって高揚し、結局はもう一つの自然と化し、事物を自然が生み出すよりも一段と見事に作り、あるいは自然の中にはかつて存在しえなかったような形姿をまったく新たに作り出すのでありま

す。」⁽⁶⁾これはワイルドの主張ではないかと、錯覚させられるほどである。⁽⁷⁾こうして比べてみるとワイルドとシドニーの主張は、実によく似ていることがわかる。ルネサンスの詩論と、19世紀末のワイルドの詩論が似ているのは、一見驚くべき事にも思われるが、これらの時代がロマン派の自然崇拝を支点として、両極にある事を考えれば、実はとても自然な事である。彼らは2人とも、「自然に帰れ」という過度の自然への信頼に、詩人として疑問を感じ、詩(広い意味での芸術)が自然や現実以上に現実であるという、パラドックスを主張している点において共通しているのである。

(2)「2つのシドニー伝」——全人的ヒーローとしてのシドニー

さて、こういう彼らの共通点を押さえたところで、ワイルドの書評「2つのシドニー伝」を見てみよう。シドニーとワイルドはいくつかの文学観を共通して持っていたと言えるが、この短い書評を読むと、この点がさらに浮き彫りにされるように思われるからである。

さて、この書評で扱われている対象は、先にも述べたように、1つはJ・A・シモンズのものであり、もう1つはエドモンド・ゴスのものだ。シモンズはオクスフォード、ベイヤル・カレッジ出の学者で、健康的なハンデをもちながらも、歴史的な事実を十分に把握し、事実を客観的に捕らえるタイプの学者であった。*DNB*の記述によれば、「彼は、少しデカダンス気味の美を持つ作家たちを扱う時、もっとも成功した」とある。ワイルドは、オクスフォード時代に、彼のギリシア崇拝(特にホモセクシュアリティの擁護)に影響を受けた事が、「*コモンプレイス・ブック*」にシモンズの本からの抜き書きがあるところから想像される。(ちなみに、シモンズも、ワイルドと同じく、有名なジュエツト教授の影響を受けた。)

それに対して、エドモンド・ゴスの方は、オクスブリッジ出身でもなく、独学で図書館員や、秘書などの経歴を重ね、実力のみでケンブリッジのトリニティ・カレッジで、クラーク記念教授にまでなった人物である。彼は個人的にはペイターとはかなり親しかったようだが、ワイルドとは、それほど深いつき合いはなかったようだ。北欧文学に造詣が深く、イギリス・ルネサンスの文学の分野でも、いくつか仕事を残している。(例えば、『*チェインバーズ英文学辞典*』では、「エリザベス朝連作ソネット」の項や「フィリップ・シドニー」の項を担当している。)

さて、ワイルドが意図したかどうかは不明だが、この2人のシドニー伝——言い換えるとシドニー論——が1886年に世に出たのは、彼のシドニーに対する自分の考えを述べるのにちょうど良い機会であったのではないかと推測され、その目的のためにこの2人の対照的な仕事は、うってつけの試金石であったと思われる。⁽⁸⁾

「2つのシドニー伝」について少し詳しくみてみよう。この匿名の書評では、まずシモンズの本（マクミラン社から1886年にEnglish Men of Letters シリーズの1冊として上梓された*Sir Philip Sidney*）について賛辞——特に彼の歴史的事実に対する造詣の深さ——が述べられ、それに比べてゴスの方（*Contemporary Review*の1886年11月号に掲載されたもの）については、事実の記述と把握が正確さを欠くという批判がされる。だが、その後でシモンズのものも、全く欠点を免れているわけではないと言う。特にシモンズには、シドニーの文学に対する審美的な評価が欠けている事をその大きな欠点として取り上げる。そして、本の長さから考えた場合、余計な部分が多いことも指摘される。ワイルドにとっては「エリザベス朝の社会の説明」よりもシドニーの「手紙」や「演劇に対する態度」の方がより知りたい情報であったようだ。またゴスの方は、「シェイクスピアやマーロウに道を開いた」と言っているが、ワイルドの考えでは、「シドニーの芸術哲学において、心理的に一番面白い事実は、彼がロマン主義的形式が持つ可能性に全く気がついていないという点だ。」この「ロマン主義的形式」の代表者は、ワイルドによれば、シェイクスピアやクリストファー・マーロウであった。ここにはワイルドの考える「ロマン主義」というものが垣間見られて興味深い。そして、最後のパラグラフでは、シモンズをもう一度持ち上げたあと、ワイルドの、シドニーに対する個人的感慨、愛着が余すところなく述べられている。

この文章で面白いと思われる点は、まず文章の最後の部分の、ワイルドのシドニーに対する、思い入れに満ちた賞賛の言葉だ。特に、ワイルドは「ロマンス」という言葉を使い、シドニーの詩人の面を大きく評価している。そして2番目として、シドニーをかなり神格化しているという点である。ワイルドは、シモンズもゴスも共に、シドニーに対するこれまでの偶像崇拜的なものを脱しようとしている、と評しているにもかかわらず、20世紀末の現在から見ると、この2人の批評家はもちろんのこと、ワイルド自身もかなりシドニーを偶像崇拜していると言える。（この点は、例えば最近のダンカン＝ジョーンズの手になるシドニー伝と比較すると一目瞭然だ。⁽⁹⁾）これはやはり、ワイルドのヒーロー像としてのシドニーという事のあらわれなのであろう。

それぞれの例をあげてみよう。まずシモンズは言う。

彼〔シドニー〕はルネサンスの英雄であった。彼の性質は、騎士道と敬虔さ、宮廷の育ちと人間の文化、政治的手腕と忠実さとを結びつけた。（中略）彼の中では、それらの要素が、何かしらスピリチュアルな化学反応によって結びつけられ、溶け合っていたように思われる。（36）

一方ゴスの方は、

理想的な詩人であると同時に、理想的な外交官でもあった彼〔シドニー〕は、知性の、男性的な性質と女性的な性質がお互いに絶対的なハーモニーをなして、バランスを取っている男だった。片方が、もう片方の性質の不足を補うようなやり方で、シドニーについて語られる事は、彼が驚くべき程度までこのバランス感覚を持っていたという事だ。（639）

そしてワイルドも、同じような賛辞を述べる。

シモンズ氏が言っているように、イギリスは、幸運にも宗教改革とルネサンスの両方を同時に経験したが、シドニーは、彼自身のうちにそれぞれの運動の、最高で、もっとも高貴な部分を体現したと言えるだろう。一方からは、ある精神の重厚さと崇高な思考の独立性を。またもう1つからは、文化と騎士道と政治的手腕、都会性を。

こうして比べてみると、3人が共通してシドニーの美点としているのは、〈調和〉とか〈バランス〉という考え方であろう。これは、イタリアのルネサンスで、レオナルド・ダ・ヴィンチのような「普遍的人間」が高く評価された事を思い起こさせる。

こういう完璧な人間像というのはもちろん、その人間の真実の姿をそのまま映したものとは言えない。実際、シドニーに関しても、その後の研究でいろいろ生々しい事実も出てきている。完璧なのではなく、いかに完璧にみせるか、いわば作られたさりげなさ、〈人工的自然〉である。そこで、パートリッジが指摘しているように、カスティリオーネの「スプレツァトーラ」という考え方を、ここで導入してみると有効である。

もともとこの「スプレツァトーラ」とワイルドを結びつけたのは、先に紹

介した E・B・パートリッジの「まじめでないことの大切さ」という論文であった。(この論文はタイトルのせいで、芝居に関する論文と誤解されがちなのだが、実はその半分はワイルドの批評について書かれている。)この言葉は、15世紀から16世紀に生きたイタリアのヒューマニスト、バルダッサレ・カステリオーネが『宮廷人』(『廷臣論』)の中で作ったものとされる。これは「ノンシャランス」という意味であり、日本語では「さりげなさ」と訳されている。この概念の典型としてパートリッジは、カステリオーネを始めとして、シドニー、ロシュフーコー、チェスターフィールドをあげたあとで、ワイルドもこの流れを受け継いでいるのではないかという仮説を立てる。その是非を考えてみる前に、『宮廷人』の中からこの語「スプレッツァトゥーラ」の説明をしている部分を引用してみよう。

つまりそれはこの上もなく怖い危険な暗礁から逃れるように、できるかぎりわざとらしさ (*la affettazione*) を避けることです。そして新語を用いて申せば、すべてにある種のさりげなさ (*sprezzatura*) を見せることです。すなわち、技巧 (*l'arte*) が表にあらわれないようにして、なんの苦もなく、あたかも考えもせず言動がなされたように見せることです。このことから大いに気品 (*la grazia*) が生じるわけです。というのは、稀なことや立派な行為 (*le cose rare e ben fatte*) には困難がつきものですが、それをいともたやすくやってのけるとなるとこの上もない讃嘆の念 (*grandissima meraviglia*) を人の心に呼び起こすものです。これに反して無理をして、いわゆるこじつけ (*il sforzare*) をやらかせば、野暮 (*disgrazia*) の骨頂になり、たとえそれがいかに立派なことであっても、あらゆるものの評価を低くすることになります。だから、気品とは、技とは見えぬ真の技であると申せましょう。(Però si po dir quella esser vera arte che non pare esser arte) またそれをひた隠しにすることのみに努めるべきなのです。というのはひとたびそれが露見すれば、あらゆる魅力は失われ、もはや賞賛されなくなりますから。」(清水純一、岩倉具忠、天野恵 訳註『カステリオーネ 宮廷人』I-26)⁽¹⁰⁾

さてこの語をめくり、パートリッジの論旨はこうだ。ワイルドのようなダンディと、カステリオーネのような宮廷人を比較するのは、牽強付会と思われるかもしれないが、アートをナチュラルな雰囲気で包み隠す事を芸術の目標としたという点で、ワイルドには「スプレッツァトゥーラ」的要素がかなりある。

ルネサンス期には、「スプレッツァトゥーラ」が、〈自然対人工〉を、人工的なものをたやすく、優雅なものとする事により、よりバランスのとれたものにした。結果として、その表現が違うのは、時代のせいであり、ワイルドは遅く生まれすぎた。機械文明の蔓延しはじめた後期ヴィクトリア朝では、「人工と自然の間のバランスが崩れてしまい」必要以上に詩を弁護する必要があったのだ。彼は自身の書いた戯曲の中の登場人物の口を借りて、その「スプレッツァトゥーラ」的人物を現出させている。(この論文ではそのあとで、彼は『真面目が肝心』を用いて、具体的にこの点を論証している。)

ここで気をつけたいのは、彼の考え方では、「スプレッツァトゥーラ」にあって、アリストクラティックである事は必要条件ではないという事である。本論の最初で話題にした『虚言の衰退』の中でワイルドは次のように述べている。「実際自然がわれわれに教えてくれるものは、自然に計画性がないこと、その奇妙な粗雑さ、その異常なまでの単調さ、その完全に未完の状態ということだ。」(24)これを先に挙げた「スプレッツァトゥーラ」の定義と見比べてみると、『虚言の衰退』では自然という有機体について言われている同じ事が、「スプレッツァトゥーラ」という概念においては、人間という有機体について言われているという事がわかる。つまり、ワイルドが主張する「人工」を体現していた場所が宮廷であり、その宮廷の代表者が「スプレッツァトゥーラ」の人、宮廷人であり、そしてもちろん当時のイギリスの代表的宮廷人はシドニーだったと言ってよいだろう。

ここにいたって、最初に述べたワイルドとシドニーの〈人工対自然〉観と、人間シドニーの魅力というものが、つながったように思える。全人的ヒーローであるシドニーは、決して自分の価値をひけらかす事なく、自然体で振るまっただ。そういうシドニーと、さりげなく見えるが、雑草が伸び放題の庭園では決してない、〈人工の自然〉(あるいは「自然らしさ」)には共通するものがあったのである。

(3) 「友愛」の対象としてのシドニー —— 作品よりも人間

以上述べたように、ワイルドはその書評「2つのワイルド伝」の中で全人的ヒーローとしてのシドニー像を表現しているが、彼はその創作の中でも、今あげたような憧憬を覗かせている。それは『W・H氏の肖像』においてである。この小説がシェイクスピアの『ソネット集』を題材にしていることを考えると、

ここにイギリス最初の連作恋愛ソネット『アストロフェルとステラ』(1591)を書いたシドニーの名が登場するのはしごく当たり前のことのように思えるが、関連はそれほど単純ではない。⁽¹¹⁾

『W・H氏の肖像』の第2章は、語り手の「私」なる人物が、アースキンの影響で、『ソネット集』のW・H氏のモデル探しに没頭している様子が描かれ、この章自体が1つのシェイクスピアの『ソネット集』論と言っても遜色がないほどである。⁽¹²⁾ ワイルド自身の代弁者ともいべき「私」は、ウィリー・ヒューズという少年俳優の存在を信じ始め、シェイクスピアがその詩集を捧げたのは、定説となっているように、青年貴族に対してではなく、この俳優に対してであったとする。そして、その裏づけをしているのがこの第2章である。その中でもこの最後の部分では、プラトニズムにおける"Friendship"という語がきっかけになって、歴史上の同性愛(というよりも男性同士の深い友愛)のカタログがあげられ、こういう種類の友愛がプラトニズム、そして芸術の立場から長々と弁護されているのである。

したがって、シェイクスピアが自分の空想の通訳者の1人を、自分の夢を具現してくれた者として崇拝していたということは、驚嘆すべきことだ。だがシェイクスピアが、劇作家としての自分の目的を、遂行するのを助けてくれた人として嬉しく思っているその感情よりも、彼に示した友情の方により深いものがある。事実、友情はそれが情熱的でないにせよ、喜びの微妙な要素だし、芸術家の仲間同士が抱く最も高尚な基本的な感情なのだ。(中略)シェイクスピアもこのプラトンの思想に心惹かれたことは確かなのだ。(74-76)

そのカタログは、ミケランジェロの男性あてのソネットの話から始まる。そこには前章でとりあげたシモンズの説が引用されている。

友人のチェッキーノ・ブラッキーの死を悼み、ルイジ・デル・リッチオに対して書かれたソネットの中には、シモンズ氏が指摘するように、もしそれが精神的なものでないなら意味がないとする愛のプラトニックな考え方、愛する人の魂の裡に不滅性を見出す形としての美が込められる。(78-79)

シュローダーの解説によると、この他にもミケランジェロの引用は、全てシモンズの英訳が使われている。⁽¹³⁾

興味深いことに、これと同じような友愛関係の、具体的カタログの中にフィリップ・シドニーの名があげられている。彼はここで、愛するものの肖像画を見る喜びを述べる例として、ユベール・ランゲのシドニーに対する友愛を挙げている。⁽¹⁴⁾

宗教改革派教会の指導者であったメランヒトンの友人で、学識豊かなユベール・ランゲは、若い頃のフィリップ・シドニーの肖像を側におき、いく時間も眼を楽しませていたが、思いは「見る事で減少するよりは増した。」と語っている。そしてシドニーも彼にこう書き送っている、「わが人生の最高の望みは、天の与え給う永遠の幸福の次のもの、それはつねに真の友情の喜びにひたることだが、その友情において貴方は最高の位置におかれている」と。(80)

シェイクスピアの有名なソネット116番「魂同士の結婚に、障害を差し挟む事なかれ」を想起させる。もちろんこのような友愛をいわゆる同性愛と同一視するかどうかは微妙なところである。

また同じところで、ワイルドはジョルダノ・ブルーノについても、シドニーへの愛を示唆するような言及をしている。そして、その当のブルーノの言葉をワイルドは原語で引用している。"A filosofia è necessario amore."「哲学にとって、愛は不可欠である」(80)、と。(ちなみに、シモンズの『シドニー伝』でも、ブルーノについては言及があるので、ひょっとしたらワイルドはここから、この小説のこの部分を思いついたのではないかと推察される。)

この章の結びでは、それ故、「彼の時代を動かした精神によって、シェイクスピアも動かされたとしても、何の不思議もない」のであり、「『過度で、場違いな愛情』について語る人々は、これらの偉大な詩の言葉や精神を理解していないのである」と論じられる。すなわち、こういう男性同士の友愛を、即肉体的なものに結びつけるような事をするのは、詮索好きの、芸術を理解しない人たちのする事だ、と言っているのである(82)。同じように熱っぽい愛情告白が、「2つのシドニー伝」の最後の部分にも登場してくる。

ワイルドと言う人物は、何か誰かに強い憧れをもつタイプの人に感じられる。そういう情緒的な自己の側面を把握していればこそ、彼はその感情の歯止めとして芸術至上主義なるものを持ち出して来たように思われるのだ。そういう線で考えた時、彼の敬愛した詩人——キーツ、バイロン、シェリー、スウィンバーンなど——の流れの中にシドニーを含める事も可能なのではないだろうか。

シドニーはもちろん大詩人であったわけだが、彼が時期尚早に亡くなった時、彼はむしろ軍人として、人間として国民に悼まれたのであった。(この点については、シモンズもゴスもワイルドも意見が一致している。) ワイルドは「2つのシドニー伝」の中で「シドニーにとっての芸術は、彼が書いたものではなく、彼の人生自体にある」と言い切っている。いかにもワイルドらしい言い方だが、実は、1881年、ワイルドが初めてエドモンド・ゴスに仮装パーティで初めて会った時に、ワイルドがゴスに言った、台詞もこれに似ている。ゴスは、たぶん謙遜して、言いました。「あなたにお会いしても、あなたに失望されるんじゃないかと不安でした。」と。それに対してワイルドは言う。「私は文学関係の人に失望したことは1度もありません。彼らはとても魅力的ですよ。失望するのは、彼らの書く物についてです」⁽¹⁵⁾と。その人生自体が作品とされるオスカー・ワイルドが述べてこそ説得力を持つ台詞だ。しかし、ゴスはこのようなパラドックスを理解するような人ではなかったらしく、その後ロビー・ロスへの手紙で次のように書いている。「私が彼を嫌いな主な理由は、彼の悪徳ではなく、彼の非現実性なのだ。」⁽¹⁶⁾

シドニーのドラマチックな死は人々の哀悼を強め、エドモンド・スペンサーをはじめ、多くの詩人が彼の追悼詩を物したが、その伝説はワイルドの時代まで受け継がれ、彼はシドニーへの思いを「2つのシドニー伝」の中でこう伝えた。

アルンヘムで彼[シドニー]が死んでから3世紀が過ぎ去ったが、今だに我々は彼の高貴な人柄の魅力を感じることができるし、すべての人達をして、彼を愛さずにはいられなくさせた魅力の何がしかを看とる事が可能である。「新たな理想」(new ideals)というものが、我々の眼前に現われてしまい、人生はたぶん、彼の時代に比べて、より複雑で理解しがたいものになってしまったのかもしれない。しかし、それでも彼を我々の心にしまっておくことは、価値があるのだ。彼、エリザベス朝宮廷の英雄、ステラへのソネット群を書いた詩人、ズットフェンで傷ついた兵士に自分の水を与えたキリスト教徒の貴族、である彼を。

(4) 結び

本論で見たワイルドとシドニーの共通性は、実にパラドキシカルなものであった。「スプレッツァトゥーラ」——言わばく人工の自然——をめぐすシドニーに対して、ワイルドをはじめとする19世紀末の3人の批評家は賛辞を与え、ヒーローとして扱った。が、ワイルドは同時に、「スプレッツァトゥーラ」の精神を心に保ちつつも、魂の奥で真の友愛は結びつくのだ、というようなモラリティックな面も強調している。この矛盾を抱えたまま、それでもあくまでのさりげなく人生を芸術として生きたという事実は、ワイルドの芸術を理解する1つの鍵であるように思われる。

ワイルドは「エロスの庭園」という詩の中で数々の詩人に対して「美の聖霊よ」(spirit of beauty)と呼びかける。彼ら詩人は、ワイルドにとってうらやましい時代に生きた詩人たちだったのかもしれない。そして、例えばキーツに対してそうだったように、憧れの詩人への想いは、その詩に対する憧れにとどまらず、その詩人の人生への憧れへと進んでいった。それはまさに『W・H氏の肖像』で詳述された、芸術家同士の「友愛」から生じてきたものではなかったか。

『エロスの庭園』に具体的なシドニーの影を見る事はできない。しかし、おそらく彼も、ワイルドにとっての「美の聖霊」の1人であったのではないだろうか。その意味で、シドニーは、ワイルドにとって大きな意味を持っていた詩人の1人だと言えるだろう。

(本稿は、平成9年11月29日に開催された第22回日本ワイルド学会秋季大会で口頭発表した原稿に加筆修正を加えたものである。)

注

- (1) Richard Ellmann, *Oscar Wilde* (Harmondsworth: Penguin Books, 1987) 140.
- (2) Anonymous (Oscar Wilde), "Two Biographies of Sir Philip Sidney." *Pall Mall Gazette* 11 Dec. 1886: 5. 以下、引用はここからのものである。
- (3) Edmund Gosse, "Sir Philip Sidney." *Contemporary Review* Nov. 1886: 632-646. J.A.Symonds, *Sir Philip Sidney* (London: Macmillan, 1886). 以下、引用の頁数はこれらからのものである。
- (4) E.B. Partridge, "The Importance of Not Being Earnest." *Bucknell Review*. 9-2 (1960): 143-

158.

- (5) 吉田正俊訳注、オスカー・ワイルド 『虚言の衰退』 (東京:研究社出版、1968) 以下引用のページ数はこのテキストに従う。
- (6) 富原芳彰訳注、フィリップ・シドニー、『詩の弁護』(東京:研究社、1973)、17。
- (7) これは『オスカー・ワイルド辞典』(東京:北星堂、1997)の「序論」で、川崎淳之助氏が述べられている、神話を作り出す力(MYTHOPOEIC FACULTY)という語が意味するところと同じであると思われる。「何もない虚の時空間の中で、一つの物語を創り出すということは、純粋な想像力によってのみ可能な、だが極めて困難な仕事である。」(41頁)。この困難な仕事を成し遂げることができるのが、詩人であるという事になるだろう。氏はその例として、ダンテの『神曲』や『ガリヴァー旅行記』の例をあげている。また、シドニーはこの例として、英雄、半神、キュクロペー、キマイラ、復讐の女神などをあげている。
- (8) ワイルドはこれまでにこの書評を書く前後に、「2つの」で始まる書評をいくつか発表していて、この比較するやり方が、ワイルドにとって書きやすい形であったと推測される。
- (9) Katherine Duncan-Jones, *Sir Philip Sidney—Courtier Poet* (London:Yale UP., 1991).
- (10) 清水純一、岩倉具忠、天野恵訳註 『カスティリオーネ 宮廷人』(東京:東海大学出版会、1987)、1-26。
- (11) 事実、第4章の最初の部分でもシドニーの名前が登場する。
- (12) 周知のようにこの作品には2つのヴァージョンがあるが、本論でとりあげる第2章は両ヴァージョンとも同じ内容であると言ってよい。
cf. Horst Schroeder, *Oscar Wilde, THE PORTRAIT OF MR W.H. Its Composition, Publication and Reception* (Braunschweig: Technische Universität Carolo-Wilhelmina zu Braunschweig)
- (13) Horst Schroeder, *Annotations to Oscar Wilde, THE PORTRAIT OF MR W.H.* (Braunschweig: Technical University of Braunschweig, 1986) 24-25.
- (14) この名前は、先に論じた「2つのシドニー伝」にもあらわれる。これはワイルドが、シドニーの伝記にかなり精通していたことの1つの証拠であろう。
- (15) Ann Thwaite, *Edmund Gosse: a literary landscape 1849-1928* (London: Secker & Warburg, 1984) 211.
- (16) Thwaite, 212.